〈研究ノート・資料〉

大学生の親扶養意識と高齢社会に対する関心度ならびに老いのイメージに関する２国間比較研究

―スリランカと日本の比較調査結果の分析―

谷口幸一[*1]・宮永耕[*1]・田中美加[*2]・妻鹿ふみ子[*1]・小林理[*1]・
児玉千代子[*2]・阿部正昭[*1]・菅野和恵[*1]・沓澤智子[*1]・
Mrs.V. Vasudevan[*3]・Mr.V.R. Jeyaruban[*3]・Mr.W.M. Dhanapala[*3]

An inquiry into the consciousness required to support one's parents and the concerns shown towards the super aged and aging societies and the images toward older people : An analytical study of the responses from University students in Japan and Sri Lanka

Kohichi YAGUCHI[*1], Koh MIYANAGA[*1], Mika TANAKA[*2], Fumiko MEGA[*1],
Osamu KOBAYASHI[*1], Chiyoko KODAMA[*2], Masaaki ABE[*1], Kazue KANNO[*1],
Tomoko KUTSUZAWA[*2], Mrs.V. Vasudevan[*3], Mr.V.R. Jeyaruban[*3] and Mr.W.M. Dhanapala[*3]

〈抄録〉

スリランカ国と日本の両国の都市部の大学生を調査対象として、彼らの親扶養の考え方、高齢社会への途上にあるスリランカ、超高齢社会に突入した日本の高齢者問題に関する知識や高齢者に対する偏見の程度やイメージについて、個別にアンケート調査を実施した。対象者は両国ともに男女各300人以上とした。全26問からなる回答を分析した結果、全体として以下の諸点で回答に相違が認められた。１）回答者の属性では、日本の大学生の年齢は20歳、兄弟数は2-3人が多く、祖父母との同居経験のある者は35%であった。他方スリランカの学生の年齢は21歳、兄弟数は4-5人が多く、祖父母との同居経験のある者は65%であった。２）将来の同別居意向は、日本は別居意向が約７割、スリランカは同居意向が約８割であった。３）将来において親が老いた時の自分との関わり方については、両国の回答に大きな格差が認められた。特に老親の世話の担い手意識、親孝行の意味内容、高齢者一般について抱く差別・偏見、高齢者層との世代間交流の意向や高齢者に対するイメージ評価おいて両国で相違が見られた。これらの回答格差の背景について、人口のエイジング、伝統的な文化・宗教に根ざす親孝行意識等の観点から考察された。

Key words：国際比較研究、高齢社会への関心度、老親扶養意識、大学生、スリランカ、日本

Ⅰ．はじめに

総務省は、2014年の「敬老の日」（9.15、国民の祝日）に合わせて日本の高齢者人口の推計を発表した（読売新聞、2014.9.15）。それによると、65歳以上の高齢者は3,296万人、総人口に占める割合は25.9% となり、性別に見ると、男性が23.0%、女性が28.7% である。また後期高齢者層の割合が増えており、75歳以上の人口が1,590万人で、総人口に占める割合は12.5% となり、８人に１人が75歳以上なっている。80歳以上も964万人で、2015年度には傘寿者以上の人口が、1,000万人の大台を突破すると予想されている。このように、世界で最も高齢者人口が多い日本においては、年金、医療、介護に関わる人的・物的負担は膨大なものになっており、社会保障制度の根幹を揺るがす国家的問題と位置づけられている。とくに人的保障の問題は深刻で、生産年齢人口（15-64歳）、年少人口（0-14歳）の減少化は、超高齢社会を支える側

＊１　東海大学健康科学部社会福祉学科（Department of Social Work,School of Health Sciences,Tokai University）
＊２　東海大学健康科学部看護学科（Department of Nursing,School of Health Sciences,Tokai University）
＊３　スリランカ・国立社会開発研究所 ソーシャルワーク部門（Department of Social Work,National Institute of Social Development,Sri Lanka）



＜スリランカ国＞（スリランカ -Wikipedia）
共和制国家。首都はスリジャヤワルダナプラコッテ
（ශ්‍රී ලංකා ප්‍රජාතාන්ත්‍රික සමාජවාදී ජනරජය（シンハラ語）
இலங்கை சனநாயக சோஷலிசக் குடியரசு（タミル語）/Sri Jayawardenepura Kotte)、[1948年２月、イギリスから自治領（英連邦王国）のセイロンとして独立。1972年にはスリランカ共和国に改称し、英連邦内の共和国となり、1978年から現在の国名となった。島国で、現在もこの国が占める主たる島をセイロン島と呼ぶ。国民の７割が仏教徒（上座部仏教）である。]

の人口の減少につながるもので、国の堅実な持続的な政策展開なしでは解決できない重要な国家的課題と位置づけられる。

他方、スリランカは、元来、仏教国であるが、３つの民族（シンハラ人約75%、タミル人約15%、ムーア人他が約１割）からなる複合国家である。行政管理区分として８つの州と25県・ 350の行政区分に分かれ、１万５千の村落から構成されている。スリランカは、圧倒的に農業国であり、人口の７割が農村地域に居住している。国連の基準では、開発途上国に区分されており、高齢化率の算定基準は60歳以上である。インドの南東に位置する日本の北海道の85% 程度の面積（65,610Sq.K.m）を有する小さな島国である。2012年現在、国の人口は2,070万人、年少人口（0-14歳）548.8万人、生産年齢人口（15-64歳）1,406.5万人、65歳以上の高齢者人口は131.6万人（高齢化率6.4%）（60歳以上の高齢化率 :12.7%)、幼児死亡率が1000： 9.4人、平均寿命は75.1歳、識字率92.2%、世帯人数は4.0人、雇用者の割合は農業部門が全体の31%・工業部門が全体の26.2%・サービス部門が全体の42.9% である（Peris, 2014)。2009年５月に1983年来四半世紀続いた内戦が集結し、政情が安定し、経済成長が加速しており、諸外国との交流にも積極的であり、日本国とは長年の友好国の関係を維持しつつ、近年更なる産業・文化の面でも協力関係が拡大している。とくに、超高齢社会日本の保健・医療・福祉の制度と当社会の諸課題に取り組む政策とその展開に対して大きな関心を寄せており、その一環として、スリランカの社会サービス省国立社会開発研究　所（National Institute of Social Development in Ministry of Social Service, Sri Lanka： NISD in Sri Lanka）のソーシャルワーク部門との学術研究交流を企画し、東海大学との学術交流に関する了解覚書（MoU:2013～2014）を締結して本研究調査の実施に至った。

Ⅱ．目的

本研究調査において、将来において若者世代が直面すると予想される親の扶養問題、高齢者一般に対する若者の考え方、現代社会において生じている高齢者問題に対する関心度、エイジズム（年齢差別）と関連する高齢者に対する態度（イメージ）等について調査することを目的とした。具体的には、同じアジア地域に位置し、基本的に仏教国である日本とスリランカ国の２国間比較調査を通じて、世界一の高齢化率（24% 台、2012, 年現在）にある日本と、今後、高齢社会に向かいつつあるスリランカ国（60歳以上人口12.5%、2012年現在）の学生の高齢者問題に関する意識や態度を比較検討することによって、ボーダレスとなりつつある東アジア・日本と南アジア・スリランカ国の高齢者保健福祉に関する若者の意識動向を知ることであった。

Ⅲ．方法

１）調査対象者：

日本の大学生は、関東圏の都市部並びにその近郊に位置する数校の大学生の３、４年生から選択された。男女半々の構成とした。男子学生300人、女子学生300人とした。同様にスリランカの大学生も、スリランカの都市コロンボ市並びにその近郊に位置する数校の大学生３、４年生を調査対象として、男女半々の構成として、各300人を調査対象とした。また対象者の所属学部が理系と文系がほぼ均等となるように、調査実施校に依頼した。

２）調査項目：

アンケート調査項目は26項目（Q1～ Q26）から構成され、各設問に対して個別回答法で回答を求める形式と

した。本調査の内容は、「内閣府・高齢社会対策に関する調査－平成15年度年齢・加齢に対する考え方に関する意識調査結果」（2003）を基に、いくつかの関連する項目群を追加して構成された。両国ともに同一の項目群とした。対象者の基本属性を知る項目群（８項目）、親との同居意向に関する項目群（２項目）、親扶養に関する意識・態度を知る項目群（６項目）、国の人口の高齢化にともない深刻になりつつある高齢者問題に関する認識を知る項目群（３項目）、高齢者一般に対する考えや社会の中での高齢者の位置づけに関する項目群（５項目）、高齢者（老人）という言葉のイメージを知る項目群（２項目）から構成された。スリランカで実施されたアンケートは、英語版を基に、NISD の出身民族の研究員を介して、現地語２言語版（シンハラ語・タミル語）に翻訳された。調査に際しての学生に対する教示は、日本語の教示ならびにスリランカの教示内容は同一とした。その日本語版は以下のとおりであった。

「このアンケート調査は、将来においてあなた方若者世代が直面すると予想される親の扶養問題に対する意識と高齢者に対するイメージ、並びに国の人口が高齢化していく現代社会に対する関心度についてお尋ねするものです。日本と南アジア・スリランカ国との国際共同調査です。各設問の回答の仕方にしたがって、すべての質問に回答してください。本調査は無記名による調査です。そして、回答は統計的に処理されるため、回答者個人が特定されることはありません。ご依頼する皆さんの自由な意思に基づいてご回答をお願いいたします。また、その理由にかかわらず、本調査にご協力いただけない場合でも現在の履修科目の成績評価等において不利益を被ることは一切ありません。集計後は、両国の回答を比較分析して結果をまとめた報告書を作成し、さらに各国の調査機関を通じて英文にて公表します。同報告書の概要は、担当教員を通じて回答にご協力いただいた学生の皆様にもご報告する予定です。」。他方、スリランカ英語版の教示は以下のとおりであった。

「The instructions in this study were given to the subjects in a class room setting by the class teacher. The contents of the instruction were as follows: “Please answer all of the questions according to the instructions in order to understand how to reply. The results that are analyzed on a statistical basis by each country’s organization will be published in each language. Furthermore,it will not affect your grade whether or not you decide to answer this inquiry. Therefore according to the purpose of this study mentioned above, it would be helpful for us if you could cooperate with this study.」

３）高齢者（老人）という言葉に対するイメージを評価する方法－相反する意味をもつ形容詞対に評定用の７段階の尺度（非常に・かなり・やや・どちらでもない・やや・かなり・非常に）をつけた Semantic Differential Method（SD 法）を用いた。SD 法は、Osgood.C.E（1957）が考案した情緒的意味（affective meaning）を測定する技法で、多段階尺度を被回答者に評定させることにより、意味の性質と強度を捉えようとするものである。本調査においては、保坂・袖井（1988）が、大学生の高齢者イメージに関する大規模研究の際に用いた50項目の尺度の中から、因子分析によって各因子に負荷の高かった項目群、計36項目から構成されている原版を採用した。

４）高齢者への差別・偏見を評価する方法－高齢者を差別する観点として、「1. イメージによる差別」、「2. 潜在的な差別」、「3. 知識による差別」の３つが指摘されている（藤田、2010）。高齢者が社会の中で差別をどの程度受けているかの測定技法として、本調査では、「知識における差別」の技法を採用した。パルモア（Palmore, E.B, 1977, 1988）は、高齢者に関する知識を問う「The fact of aging quiz： FAQ」という尺度を開発し、高齢者に関する知識に正しく答えられなかった場合、その項目が高齢者に対する肯定的役割を示しているか、否定的な偏りを示していたかによって、肯定的差別態度、否定的差別態度を持っているかが区別されるとした。このFAQ 技法を用いた藤田ら（2000）の研究では、小学生段階では肯定的差別態度が多く、以後学年進行とともに低下し、中学生期を境に否定的差別態度が上昇するということを明らかにしている。本研究では、既述のパルモアが考案した FAQ の観点から、高齢者の認知機能や生活行動の特徴に対する考えを問う項目群（内閣府、2003）を構成して、高齢者イメージや高齢社会への関心度、高齢世代との交流意欲との関連性を検討した。

５）調査期間：2013年９月～2014年１月の期間に本調査を依頼した大学のキャンパスにて、所定の講義終了時に実施され、回答後に直ちに回収された。

６）研究倫理審査：東海大学健康科学部倫理委員会並びに東海大学湘南キャンパスの「人を対象とする研究倫理審査会」の審理を経て、本研究の実施の承認を得た後、

表１　調査対象者の国別・性別の年齢平均

国	日本			スリランカ		
性別	N	Mean	SD	N	Mean	SD
男	368	20.2	1.1	229	21.3	0.7
女	696	20.1	1.1	371	21.3	0.7

各大学に調査を依頼し、さらに調査協力大学の倫理審査会の承認を経て、実際の調査実施に至った。スリランカの大学生に対する調査は、NISD in Sri Lankaの倫理委員会の承認を得てのち、同国の国立大学５校に調査が依頼され、各校の実施担当者に対する調査のためのガイダンスを実施後に本調査が実施された。

Ⅳ．結果と考察

１．調査対象者の基本属性

１）対象者の年齢（Q1. Q2）

日本の大学生の回答者数（1064人）において、男子学生が368人（35%）、女子学生が696人（65%）、平均年齢は、男性20.2歳（SD=1.1）、女性20.1歳（SD=1.1）であった。他方、スリランカの学生群（600人）は、男子学生が229人（38.2%）、女子学生が371人（61.8%）、平均年齢は、男性21.3歳（SD=0.7、女性21.3歳（SD=0.7）であった。結果、両国ともに回答者の性別割合、年齢もほぼ同水準であった（表１）。

２）兄弟の数（Q3）

日本の学生回答者の兄弟の数は、「２人」が男子50%、女子56%で最も多かった。次に「３人」が男子30%、女子26%であった。「一人」は男子13%、女子11%であった。兄弟の数は、男女ともに、２人と３人で約８割を占めていた。他方、スリランカの学生群の兄弟数は、「４人」が男子32.3%,. 女子36.7%で最も多かった。次に「５人」が男子34.5%, 女子32.6%であった。「６人」が、男子15.3%, 女子12.4%であった。次に「３人」が、男子11.8%, 女子11.3%であった。兄弟の数は、男女ともに４人と５人で、約７割であった。結果、スリランカの学生の兄弟数が、４～６人で約８割を占めていたが、日本の学生の兄弟数は、２～３人で約８割であり、スリランカの学生の兄弟数がおおむね２人ほど多かった。

３）父母の生存率（Q4. Q5）

日本の回答者の父の生存率は、男子97.1%、女子98.3%で、ともに97%以上であった。また母親の生存率は、男子98.1%、女子98.7%で、ともに98%であった。他方、スリランカの学生の父の生存率は、男子92.1%、女子91.9%で、ともに91%以上であった。また母親の生存率は、男子97.8%、女子98.4%で、ともに97%以上であった。結果、母親の生存率は98%前後で両国でほぼ同水準であったが、父親の生存率はスリランカが91%で、日本の97%と比べて６%少なかった。数年前（2009）までスリランカでは内乱が続いていた結果、父親（夫）の戦死者が多く、女性の世帯主が多いという社会的背景も一因であると考えられた。

４）祖父母の生存率（Q6. Q7）

日本の学生回答者の祖父（２人の中で、１人以上）の生存率は、男子72%、女子69%で、全体で約70%であり、また祖母（２人の中で、１人以上）の生存率は、男子92%、女子93%で、全体で93%であった。他方、スリランカの学生回答者の祖父（２人の中で、１人以上）の生存率は、男子21%、女子23.7%で、全体で約22.7%であり、また祖母（２人の中で、１人以上）の生存率は、男子48.9%、女子56.9%で、全体で53.8%であった。結果、両国の学生の祖父の生存率で約50%の差があり、祖母の生存率では約40%の差異がみられた。両国の平均寿命の差異（スリランカ：男子71.2歳；女子74.4歳／日本：男子79.6歳、女子86.4歳、両国とも2010年度統計）が、この生存率の差異と関連していると考えられる。

５）祖父母との同居経験（Q8.）

大学入学前の祖父母との同居経験は、日本の男子35%、女子35%で、全体で35%であった。他方、スリランカの学生の同居経験は男子65.9%、女子65.8%で、全体で65%であった。結果、両国で祖父母との同居経験の有無の割合は逆転しており、祖父母との物理的な交流機会は、スリランカの学生の方が圧倒的に多いという結果であった。

２．両親との将来の同居意向

１）結婚後の親との同居についての考え方（Q9）

日本の学生の結婚後の親との同居に関する考え方を聞いた結果、全体として、一位が「5. 常に行き来できれば別居していても良い」（35.6%）、二位が「3. 親が元気なうちは別居し、親が虚弱になったら一緒に暮らすのが良い」（23.9%）、三位が「1. できるかぎり別居するのが良い」（14.5%）、四位が「2. できるかぎり一緒に暮らす」

（10.6%）、五位が「6. 考えたことがない」（8.8%）、六位が「4. 親が一人になったら、一緒に暮らす」（6.6%）であった。他方、スリランカの学生の回答は、一位が「2. できるかぎり一緒に暮らすのが良い」（63.6%）、二位が「3. 親が元気なうちは別居し、親が虚弱になったら一緒に暮らすのが良い」（16.7%）、三位が「5. 常に行き来できれば別居していても良い」（14.6%）、四位が「4. 親が一人になったら、一緒に暮らす」（2.7%）、五位が「6. 考えたことがない」（2.6%）、六位が「1. できる限り別居するのが良い」（1.9%）の順であった。結果、日本の学生は、別居志向が75% であり、スリランカの学生は約80% が同居志向であった。

２）回答者自身の親との将来の同居意向（Q10）

日本の学生の将来の親との同居意向についての回答は、全体として「1. 同居志向」が9.9%、「2. まだ分からない」が63.3%、「3. 同居しない」が26.8% であった。他方、スリランカの学生の回答は、全体として、将来の親との「1. 同居志向」のある学生は89.6%、「2. まだ分からない」が9.1%、「3. 同居しない」が1.3% であった。結果、日本の学生は、同居志向がわずか１割、他方、スリランカの学生は約９割であった。両国で親との住まい方、距離の置き方に明らかな違いが認められた。

３．老親に対する経済的扶養意識

１）経済的な扶養意識（Q11）

老親に対する経済的扶養意識は、日本の学生は、全体で、一位が「2. 自分の生活力に応じて養う」（61.7%）、二位が「1. 親が老齢になったら、どんなことをしても子どもが扶養する」（25.5%）、三位が「3. 経済的に十分な余裕がなければ、子どもが扶養しないのもやむを得ない」（10.3%）、四位が「4. 養老金など社会保障によって社会が扶養すべきだ」（2.5%）であった。他方、スリランカの学生では、全体で一位が「1. 親が老齢になったら、どんなことをしても子どもが扶養する」（70.9%）、二位が「2. 自分の生活力に応じて養う」（29.0%）、三位が「3. 経済的に十分な余裕がなければ、子どもが扶養しないのもやむを得ない」（0.8%）、四位が「4. 養老金など社会保障によって社会が扶養すべきだ」（0.7%）であった。結果、両国の「老親に対する経済的扶養は当然」とする回答割合は、スリランカの学生は約70%、日本は全体の25% であり、両国で大きな違いが認められた。

４．老親の世話・介護意識

１）親の日常生活の世話の担い手（Q12）

日本の大学生の回答した「老親に対する日常的世話の担い手」は、全体で一位が「2. 子供と社会の両者で世話するのが適当である」（41.6%）、二位が「3. 主として子供がするが、子どもの力の及ばない時は、社会が世話をするのが適当である」（39.8%）で、三位が「1. 子どもが世話するのが当然である」（11.3%）、四位が「4. 主として社会が世話をして、社会の力が及ばないところを子どもが世話をするのが適当である」（7.1%）、五位が「5. すべて社会が世話をするべきである」（0.2%）であった。他方、スリランカの学生は、全体で一位が「1. 子供が世話するのが当然」（41.7%）、二位が「3. 子供が主、社会が従が適当」（40.0%）で、三位が「2. 子供と社会の両者で世話が適当」（17.7%）、四位が「5. すべて社会が世話するべき」（0.8%）で、五位が「4. 社会が主で、子どもが従」（０%）であった。結果、スリランカでは、「1. 子供が世話するのが当然」が約４割強、日本の学生は約１割であり、他方、日本の学生は、「2. 子供と社会の両者で世話するのが当然」が約４割で、スリランカの学生は２割弱であった。公的介護保険制度のある日本と私的な家族扶養が中心のスリランカとの相違が背景理由と考えられた。

２）親の介護の担い手としての意向（Q13）

日本の学生の回答は、「老親の世話の担い手が、自分しかいない場合」の回答は、全体として一位が「4. どうするか分からない」（41.2%）、二位が「1. 何をおいても世話する」（32.0%）、三位が「3. 施設に入れる」（20.2%）、四位が「2. お金を払って人に頼む」（6.6%）であった。他方、スリランカの学生は、全体として、第一位が「1. 何をおいても世話する」（84.7%）、二位が「2. お金を払って人に頼む」（13.3%）、三位が「4. どうするか分からない」（2.7%）であった。「3. 施設にいれる」を選択した者は皆無（０%）であった。結果、日本は、「4. どうするか分からない」が４割で最も多く、スリランカでは、「1. 何をおいても世話する」が、約85% と圧倒的に多かった。スリランカでは、老親介護を担える福祉・医療の施設が少ないこと、身内による親扶養の伝統的な考え方の差異が背景にあると思われた。

３）親の施設入所についての考え方（Q14）

日本の学生で、老親が施設に入所することに対する考えは、全体で一位が「2. 出来るだけ施設入所は避けたい」（46.5%）、二位が「1. 家庭介護が無理なので仕方がない」（39.8%）、三位が「4. あまり良く分からない」（11.2%）、四位が「3. 親不孝である」（2.4%）であった。

他方、スリランカの学生は、第一位は「2. できるだけ施設入所は避けたい」(62.8%)、第二位は「3. 親不孝である」(27.0%)、三位は、「4. 良く分からない」(9.7%)、四位は、「1. 家庭介護が無理なので仕方がない」(2.2%) であった。結果、「2. 出来るだけ施設入所は避けたい」の回答が、両国で最も多い回答であったが、スリランカが６割以上、日本が４割台であった。また、「3. 親不孝である」と考える割合は、スリランカが３割弱、日本はわずか２% であった。このように両国で「親不孝である」と考える割合に25% も差異が見られたことは、スリランカには、古来からの子どもが親を直接にケアすることが当然とする仏教思想に根ざす伝統的な親孝行の考え方が根強いことが示唆される。

５．伝統的な親扶養・親孝行についての考え方

１）老親扶養に関する考え方（Q15）

日本の学生の伝統的老親扶養（家庭で子どもが親を扶養すること）の考え方についての回答は、全体で「1. とても良い習慣であるから継承すべきである」(21.7%)、「2. あまり良い習慣とは思わない」(8.2%)、「3. 現状から言うと、あまり現実的でない」(39.8%)、「4. よく分からない」(30.3%)、であった。他方、スリランカの学生の回答は、全体で、「1. とても良い習慣であるから継承すべきである」(73.7%)、「2. あまり良い習慣とは思わない」(1.5%)、「3. 現状から言うとあまり現実的ではない」(8.3%)、「4. よく分からない」(16.5%) であった。結果、スリランカの学生は、「良い習慣ゆえに継承すべき」が７割以上であったが、日本の学生は約２割であり、５割の差異が認められた。日本の学生は「現状では現実的でない」が約４割と最も多く、また「良く分からない」も３割で、旧憲法下で唱道された伝統的な老親扶養の考え方にも懐疑的な回答が多かった。

２）親孝行についての考え方（Q16）

日本の大学生の「親孝行についての考え方の回答」(複数回答) は、全体として、「1. 親の話し相手になったり、親と頻繁に交流すること」(64.8%)、「2. 親の身の回りの世話をしたり、看病すること」(18.7%)、「3. 親を経済的に扶養すること」(16.0%)、「4. 自分が自立し、親に心配をかけないこと」(59.2%) であった。他方、スリランカの学生の回答は、全体で、「1. 親の話し相手になったり、親と頻繁に交流すること」(47.7%)、「2. 親の身の回りの世話をしたり、看病すること」(45.2%)、「3. 親を経済的に扶養すること」(3.8%)、「4. 自分が自立し、親に心配をかけないこと」(13.0%) であった。結果、親孝行に関する考え方として、「1. 親の話相手になったり、親と頻繁に交流すること」は、両国ともに回答した割合が最も多く、「3. 親を経済的に扶養すること」が、両国共に回答がもっとも少なかった。「2. 親の身の回りの世話をしたり、看病すること」は、日本の学生が約２割弱に対して、スリランカの学生は４割強と２倍以上も多かった。公的な介護保険制度のある日本に対して、その制度のないスリランカでは、身の回りの世話や看病という物的・直接的な関わりを重視せざるを得ない社会的背景があると考えられる。

６．国が抱える高齢者問題への関心度・深刻度

１）高齢者問題への関心度（Q17）

日本の大学生の「わが国の高齢者問題への関心度」の回答は、全体として一位が「2. 少し関心がある」(60.2%)、二位が「1. 非常に関心がある」(21.2%)、三位が「3. あまり関心がない」(16.5%)、四位が「4. 全然関心がない」(2.1%) であった。結果、関心があるの回答が、全体の８割を超えていた。他方、スリランカの学生は、全体として一位が「2. 少し関心がある」(67.5%)、二位が「3. あまり関心がない」(18.2%)、三位が「1. 非常に関心がある」(13.2%)、四位が「4. 全然関心がない」(13.2%) であった。結果、高齢者問題に対する学生の関心度は両国ともに「関心がある」を合計すると約８割であり、関心度においてはほぼ同率であった。高齢化率は、日本が2012年現在、24% 台、スリランカは７% 弱で、両者に３倍以上の差があるにも関わらず、スリランカの大学生というエリート層（同年代層の約２% が大学生）の回答結果であることから、高齢社会に近づきつつある国の近未来の人口問題に対する関心度は、同年代の他の非学生層よりも高いという社会的背景が影響していると考えられる（表２）。

２）高齢者問題への考え方（Q18. Q19）

我が国の高齢者問題についての深刻度の回答は、一位

表２　わが国の高齢者問題への関心についての回答（Q17）

回答選択肢	1.非常に関心がある	2.少し関心がある	3.あまり関心がない	4.全然関心がない	計
日本(全体)	226	640	176	22	1064
回答割合(%)	21.2	60.2	16.5	2.1	
スリランカ(全体)	79	405	109	7	600
回答割合(%)	13.2	67.5	18.2	1.2	

表３　我が国の高齢者問題についての考えの回答（Q18）

回答選択肢	1.相当深である	2.よく分からない	3.全然問題ではない	4.計
日本(全体)	843	214	7	1064
回答割合(%)	79.2	20.1	0.7	
スリランカ(全体)	310	264	26	600
回答割合(%)	51.7	44.0	4.3	

表４　政府や行政に対する老人福祉サービスについての希望の回答（Q19）

回答選択肢	1.高齢者施設の増設	2.在宅サービスの充実	3.施設と在宅のサービスの充実	4.今のままで良い	5.特にない	計
日本(全体)	161	231	572	21	79	1064
回答割合(%)	15.1	21.7	53.8	2.0	7.5	
スリランカ(全体)	8	265	281	18	40	600
回答割合(%)	1.3	44.2	46.8	3.1	6.7	

が「1. 相当深刻である」（79.2%）、二位が「2. よく分からない」（20.1%）、三位が「3. 全然問題ではない」（0.7%）であった。結果、全体の約８割が日本の現状は深刻であると認めていた。他方、スリランカの学生は、一位が「1. 相当深刻である」（51.7%）、二位が「2. よく分からない」（44.0%）、三位が「3. 全然問題ではない」（4.3%）であった。結果、自国の高齢者問題の深刻度が高いと認めている割合は、日本の大学生は約８割、スリランカの学生は約５割であり、両者に３割も相違がみられた。反面、「2. よく分からない」が日本は２割に対してスリランカは４割以上であり、また「3. 全然問題ではない」が日本は１％弱、スリランカは４％以上であった。この背景には、高齢化率の違いが背景にあると考えらる。高齢化問題への関心度の回答結果（Q17）と合わせて考えると、高齢化問題への知識としての関心は高いが、現実生活への影響度は少ないことから、両国の回答割合に相違が認められたと考えられる（表３）。

７．行政に対する老人福祉サービスへの要望

日本の学生の政府・行政に対する老人福祉サービスについての希望（Q19）の回答は、一位が「3. 施設と在宅サービスを充実させるべき」（53.8%）、二位が「2. 在宅サービスを充実させるべきである」（21.7%）、三位が「1. 高齢者施設をもっと増やすべき」（15.1%）、四位が「5. 特にない」（7.5%）、五位が「4. 今のままで良い」（2.0%）であった。全体として、施設と在宅の両方のサービスの充実を望む回答が５割を超えていた。他方、スリランカの学生の回答では、全体として、一位が「3. 施設と在宅サービスの充実」（46.8%）、二位が「2. 在宅サービスの充実」（44.2%）、三位が「5. 特にない」（6.7%）、四位が「4. 今のままで良い」（3.1%）、五位が「1. 高齢者施設の増設」（1.3%）であった。結果、「施設と在宅サービスの充実」と「在宅サービスの充実」の回答割合が、両国ともに上位２位を占めていた。他方「高齢者施設の増設」と回答した割合は、日本が15% あったのに対して、スリランカはわずか1.3% であり、回答に大きな相違が認められた。この背景理由として、スリランカは高齢者を施設でケアするという考え方が薄いこと、もともと家族による老親のケアが主流であること、また高齢化率の低さなどから、介護福祉施設（仏教系・キリスト教系などの老人ホーム等）は少なく、直接の福祉施設の増設希望に結びつかないという事情が考えられる（表４）。

８．高齢者一般についての考え方

日本の学生の「高齢者一般についての考え方」（Q20）についての回答結果（複数回答：表５）は、全体として、一位が「1. 心身が衰え、健康面での不安が大きい」（72.7%）、二位が「2. 経験・知恵が豊かである」（68.6%）、三位が「4. 時間にしばられず、好きなことに取り組める」（41.7%）、四位が「5. 古い考え方にとらわれがちである」（29.6%）、五位が「6. 周りの人との触れ合いが少なく、孤独である」（25.6%）、六位が「3. 収入が少なく経済的な不安が大きい」（24.4%）、七位が「8. ボランティアや地域の活動で、社会に貢献している」（17.3%）、八位が「7. 健康的な生活習慣を実践している」（16.8%）、九位が「9. 貯蓄や住宅などの資産があり、経済的にゆとりがある」（16.5%）、10位が「10. 仕事をしていないため、社会の役に立っていない」（3.3%）の順であった。全体として、過半数を超えていた考え方は、「1. 心身が衰え、健康面での不安が大きい」と「2. 経験・知恵が豊かである」であった。他方、スリランカの学生の回答は、全体として、一位が「1. 心身が衰え、健康面での不安が大き

表５　高齢者一般についての考え方の回答（Q20）

回答選択肢	1.心身の衰え・健康不安	2.経験・知恵が豊か	3.経済的不安	4.自由な時間と行動	5.古い考えに固執	6..孤独と孤立	7.健康的生活習慣	8.社会貢献	9.経済的ゆとり	10.退職し社会的無用	計
日本(全体)	774	730	260	444	315	272	179	184	176	35	1064
回答割合(%)	72.7	68.6	24.4	41.7	29.6	25.6	16.8	17.3	16.5	3.3	
スリランカ(全体)	478	229	34	44	82	87	23	62	22	23	600
回答割合(%)	79.9	38.4	5.7	7.4	13.7	14.6	3.9	10.4	3.7	3.9	

表６　日本の社会では、高齢者は優遇されているかの回答（Q21）

回答選択肢	1.そう思う	2.まあそう思う	3.あまりそう思わない	4.そう思わない	計
日本(全体)	106	512	412	34	1064
回答割合(%)	10.0	48.1	38.7	3.2	
スリランカ(全体)	84	320	178	15	597
回答割合(%)	14.1	53.6	29.8	2.5	

表７　高齢者に対する差別・偏見についての回答（Q22）

回答選択肢	1.大いにある	2.あると思う	3.多少ある	4.あまりない	5.全くない	計
計	92	362	468	130	12	1064
回答割合(%)	8.6	34.0	44.0	12.2	1.1	
スリランカ(全体)	105	170	285	32	4	596
回答割合(%)	17.6	28.5	47.8	5.4	0.7	

い」(79.9%)、二位が「2. 経験・知恵が豊かである」(38.4%)、三位が「6. 周りの人との触れ合いが少なく、孤独である」(14.6%)、四位が「5. 古い考え方にとらわれがちである」(13.7%)、五位が「8. ボランティアや地域の活動で、社会に貢献している」(10.4%)、六位が「4. 時間にしばられず、好きなことに取り組める」(7.4%)、七位が「3. 収入が少なく経済的な不安が大きい」(5.7%)、八位が「7. 健康的な生活習慣を実践している」(3.9%)、九位が「10. 仕事をしていないため、社会の役に立っていない」(3.9%)、十位が「9. 貯蓄や住宅などの資産があり、経済的にゆとりがある」(3.7%) の順であった。全体として、過半数を超えていた考え方は、「1. 心身の衰え・健康不安」のみであった。結果、日本の学生は、スリランカの学生に比べて、高齢者に対する否定的差別項目と肯定的差別項目の両面を多く認めている傾向が示された。この背景には、日本の高齢者問題が生活に直接に影響している現実的問題であり、かつ介護・年金・医療負担などの面で深刻度が高いという理由が考えられる（表５）。

９．社会における高齢者の待遇・差別偏見・世代間交流について

１）高齢者の待遇について（Q21）

日本の大学生の「高齢者は社会で優遇されているか」の回答は、全体として「1. そう思う」(10.0%)、「2. まあそう思う」(48.1%)、「3. あまりそう思わない」(38.7%)。「4. そう思わない」(3.2%) であった。結果、６割弱が肯定し、４割強が否定していた。他方、スリランカの学生は、全体として「1. そう思う」(14.1%)、「2. まあそう思う」(53.6%)、「3. あまりそう思わない」(29.8%)。「4. そう思わない」(2.5%) であった。結果、７割弱が肯定し、３割強が否定していた。社会の中で高齢者は優遇されていると思っている学生は、両国ともにほぼ６、７割であった。（表６）。

２）高齢者に対する差別・偏見（Q22）

日本の大学生の「高齢者に対する差別・偏見があるか」の回答は、全体として「1. 大いにあると思う」(8.6%)、「2. あると思う」(34.0%)、「3. 多少あると思う」(44.0%)、「4. あまりないと思う」(12.2%)、「5. 全くないと思う」(1.1%) であった。結果、高齢者に対する差別・偏見の存在を認めた回答は、約９割弱であった。他方、スリランカの学生の回答は全体として「1. 大いにあると思う」(17.6%)、「2. あると思う」(28.5%)、「3. 多少あると思う」(47.8%)、「4. あまりないと思う」(5.4%)、「5. 全くないと思う」(0.7%) であった。結果、高齢者に対する差別・偏見の存在を認めた回答は、約９割強であった。以上、社会の中に高齢者に対する差別・偏見があると認める割合は、両国ともにほぼ９割であった。しかし、高齢者一般に対する考え方の回答結果では、差別・偏見の存在を肯定する項目別の回答率は、日本の学生の回答率かいずれの項目においても高いことから、高齢者問題への関心の強さや高齢者問題の深刻度との関連性も検討する必要があろう（表７）。

３）世代間交流についての意向（Q23）

日本の学生の「高齢者世代との交流について」の回答は、全体として、「1. 交流したい」(53.8%)、「2. どちら

表８　高齢者と他世代との交流についての回答（Q23）

回答選択肢	1.交流したい	2.どちらでも良い	3.交流したくない	計
計	572	453	39	1064
回答割合(%)	53.8	42.6	3.7	
スリランカ(全体)	410	183	3	596
回答割合(%)	68.8	30.7	0.5	

表９　高齢者イメージの評価に用いた因子別の形容詞対語

因子	形容詞対語		paired adjective lists	
有能性 competecy	劣った	優れた	inferior	superior
	無能な	有能な	incompetent	competent
	低俗な	高尚な	undignified	dignified
活動自立性 independence	静的	動的	inactive	active
	暇そう	忙しそう	free	busy
	非生産的	生産的	unproductive	productive
幸福性 happiness	空っぽな	満たされた	empty	full
	灰色	バラ色	gray	rosy
	不幸	幸福	unhappiness	happiness
協調性 cooperativeness	主観的	客観的	subjective	objective
	強情な	素直な	obstinate	gentle
	感情的	理性的	emotional	rational
温和性 gentleness	厳しい	優しい	severe	gentle
	いばった	へりくだった	overbearing	humble
	憎らしい	愛らしい	odious	lovely
社会的外向性 extroversion	消極的	積極的	negative	positive
	閉鎖的	開放的	closed	open
	内向的	外向的	introverted	extroverted

でも良い」（42.6%）、「3. 交流したくない」（3.7%）であった。結果、約５割の学生が高齢者との交流を望み、約５割が高齢者との交流に消極的であった。他方、スリランカの学生の回答は、全体として「1. 交流したい」（68.8%）、「2. どちらでも良い」（30.7%）、「3. 交流したくない」（0.5%）であった。結果、約７割の学生が高齢者との交流を望み、約３割が高齢者との交流に消極的であった。以上、高齢者世代との交流活動を望む割合は、スリランカの学生の方が、日本の学生に比べて２割ほど高いという結果であった。祖父母との同居率や伝統的な家族による親扶養の考え方が、日本よりも根強いことなどが、その背景にあると考えられる（表８）。

10. 調査対象者の所属学部

日本の大学生の回答者の学部別の内訳（Q24）は、全体で、「1. 文学・福祉系学部」（40.6%）、「2. 理工系学部」（12.4%）、「3. 保健医療系学部」（18.1%）、「4. 体育系学部」（7.6%）、「5. 芸術系学部」（0.8%）、「6. その他」（教育系・心理系学部）（20.4%）であった。全体として、理系学部が約３割、文系学部が約７割であった。他方、スリランカの学生の所属学部は、全体としてみると、「1. 文学・福祉系学部」（０%）、「2. 理工系学部」（24.5%）、「3. 保健医療系学部」（2.5%）、「4. 体育系学部」（０%）、「5. 芸術系学部」（30.7%）、「6. その他」（教育系・心理系学部）（42.3%）であった。以上、回答者の所属学部の内訳を比較したところ、両国ともに理系学部が約３割、文系学部が約７割で、ほぼ同じ割合であった。

11. 高齢者（老人）という言葉に対する形容詞イメージの評価（Q25）

高齢者（老人）に対する態度を評価する方法として、幾つかの技法があるが、結果に述べたように、本調査では、対象となる事象（言葉）に対するイメージを問うSD method（ Semantic differential Method： 意味微分法）を用いた。本調査に用いた「高齢者イメージ評定尺度」は、「有能性」「活動自立性」「幸福性」、「協調性」、「温和性」「社会的外向性」から構成されている。各因子の得点は、先行研究で因子分析を行った際に、それぞれの因子に最も負荷量の大きかった上位３尺度の平均得点を用いた（表９）。尺度の方向は集計時点で統一されている。各因子の評点が高いほど、その因子について肯定的なイメージを持っていることを意味している。

日本の大学生において、各イメージ因子ごとの平均値の性差を調べた結果、すべての因子で有意差は認められなかった。この結果を受けて、高齢者イメージ因子の分析を行う場合、性別の分析を行わず、全体の群として扱

表10　高齢者一般に対する考え方を問う質問群

1. 心身がおとろえ、健康面での不安が大きい
2. 経験や知恵が豊かである
3. 収入が少なく経済面の不安が大きい
4. 時間にしばられず、好きなことに取り組める
5. 古い考えにとらわれがちである
6. 周りの人との触れ合いが少なく、孤独である。
7. 健康的な生活習慣を実践している
8. ボランティアや地域の活動で、社会に貢献している
9. 貯蓄や住宅などの資産があり、経済的にゆとりがある
10. 仕事をしていないため、社会の役に立っていない

注)質問番号,2,4,7,8,9の項目は、肯定的差別態度に属する項目である。
その他の項目は、否定的差別態度に属する項目である。
本調査項目は、内閣府(2003)の平成15年度年齢・加齢に対する考え方に関する意識調査から引用した。

表11 「高齢者に対する一般的考え方「と「高齢者イメージ」の因子別得点の偏相関係数（日本の学生群）

	高齢者イメージ因子					
高齢者に対する考え方	有能性	活動自立性	幸福性	協調性	温和性	社会的外向
肯定的差別態度(5項目)	0.267	0.101	0.297	0.094	0.217	0.214
否定的差別態度(5項目)	−0.221	−0.216	−0.168	−0.147	−0.168	−0.186

注)　対象者数:N=1064, 調整変数:年齢と性別,表中の偏相関係数はすべて有意（有意水準:p<.01）

うことにした。全体としての各イメージ因子の平均値をスコアの低い順に並べると、「活動自立性」、「協調性」が10点台、「有能性」「幸福性」「温和性」「社会的外向性」は12点台と比較的に高い平均値を示した（各因子の評価点は３～21点の範囲を持つ)。他方、スリランカの大学生においては、全体としての各イメージ因子の平均値をスコアの低い順に並べると、「協調性」10点台、「活動自立性」12点台、「社会的外向性」と「温和性」が13点台、「幸福性」14点台、「有能性」15点台であった。因子別の平均値間の検定の結果、「幸福性」と「温和性」に有意な性差が認められた。以上の結果から、両国の学生の高齢者のイメージ得点を比較すると、おおむねスリランカの学生の方が、高齢者イメージの評点は高い傾向が認められた。その背景には、祖父母との同居率、老親の扶養意識、高齢者との交流意識が日本の大学生よりも高いことが関連していると考えられる。

12. 高齢者イメージ評定を行う際に思い浮かべた高齢者の健康状態（Q26）

高齢者イメージを評定する際に、健康度において異なる３つの高齢者像を示して、各回答者がどの高齢者像を思い浮かべながら評定したかの回答を検討した結果、両国でイメージされた高齢者像の割合は真逆の割合となった。すなわち、高齢者（老人）をイメージする際に想定した高齢者の状態像は、日本の学生の場合、全体の４分の３が自立した高齢者像であり、スリランカの学生の場合は、全体の５分の４が「要介護の高齢者」であった。その背景には、日本の学生の場合、、回答した学生の35% が同居経験があり、65% が同居した経験はなかった。このことは、自立から要援護、要介護状態へと次第に変化する祖父母の老いゆく過程を身近で観る機会が少ないという生活経験の質が、思い出す高齢者の状態像に影響しているとも考えられる。さらなる背景分析が必要と思われた。

13. 関連の分析

１）高齢者一般についての考え方と高齢者イメージの関連

高齢者一般についての考え方（表10）を肯定的差別態度と否定的差別態度に分けて、高齢者イメージの６因子との偏相関（年齢と性別を統制）を見た結果、日本の学生群（N =1064）においては、肯定的差別態度の項目を多く選択した者ほど、高齢者のイメージは、どの因子においても有意な正の相関を示し、老人に対する肯定的なイメージが高いことが認められた。また、否定的差別態度の項目を多く選択した者ほど、高齢者イメージは、どの因子においても有意な負の偏相関を示し、高齢者イメージは、どの因子においても有意な負の偏相関を示し、高齢者イメージは否定的になることが認められた（表11)。尚、スリランカの学生群（N =600）においては、肯定的差別態度（５項目）と高齢者イメージの各因子との間で偏相関（年齢と性別を統制）を計算した結果、唯一、「協調性」との間に有意な正の相関が認められたが、その他の高齢者イメージ因子との有意な相関は認められなかった。また「否定的差別態度（５項目)」と高齢者イメージの各因子得点との間には、全ての組み合わせにおいて有意な相関は認められなかった。さらに、両国の

表12　高齢者問題への関心度と差別・偏見を認める程度と世代間交流意向との関連（偏相関）（Q17,Q22,Q23）

	日本			スリランカ		
	Q17	Q22	Q23	Q17	Q22	Q23
Q17.高齢者問題への関心						
Q22.高齢者への差別・偏見	0.094					
Q23.世代間交流への意欲	0.316			0.245	0.101	

注）　対象者数:N=1064, 調整変数:年齢と性別,表中の偏相関係数はすべて有意（有意水準:p<.01）

表13　高齢者に対する差別・偏見の認識の程度から見た高齢者イメージ因子の比較（Q22改）（日本の学生群）

イメージ因子	偏見・差別があると認める程度	N	平均値	標準偏差	多重比較(t検定)p<.05
有能性	①大いにある・ある	454	12.3	2.2	①vs③;②vs③..
	②多少ある	468	12.6	2.1	
	③あまりない・ない	142	13.2	2.1	
活動自立性	①大いにある・ある	454	9.7	2.4	①vs.②;①vs.③.
	②多少ある	468	10.1	2.2	
	③あまりない・ない	142	10.4	2.3	
幸福性	①大いにある・ある	454	12.3	2.2	①vs.③.
	②多少ある	468	12.5	2.1	
	③あまりない・ない	142	12.9	2.1	
協調性	①大いにある・ある	454	10.4	2.6	①vs.③.
	②多少ある	468	10.7	2.3	
	③あまりない・ない	142	11.1	2.4	
温和性	①大いにある・ある	454	12.3	2.7	①vs.③.
	②多少ある	468	12.7	2.3	
	③あまりない・ない	142	13.1	2.7	
社会的外向性	①大いにある・ある	454	12.1	2.7	①vs.②.
	②多少ある	468	12.5	2.6	
	③あまりない・ない	142	12.3	2.7	

注)高齢者のイメージに関する各因子の得点が低いほど、社会における高齢者に対する差別・偏見のあることを認める程度が高い。

高齢者イメージの因子構造の再分析の必要が認められる。

２）高齢者問題への関心度と高齢者に対する差別・偏見と高齢世代との交流意向の関連

日本の大学生に対して、高齢者問題への関心度と高齢者に対する差別・偏見があると認める程度と高齢世代との交流意向の３者間の関連を検討した。表12に示すように、高齢者問題への関心が高いほど、高齢者に対する差別・偏見のあることを認めており、また高齢者と交流したいという意欲が高いということが明らかとなった。他方、スリランカの学生においても、高齢者問題への関心が高いほど、高齢者と交流したいという意欲が高いこと、さらに高齢者に対する差別・偏見を認めているほど、世代間の交流意欲も高いことが明らかとなった。

３）高齢者に対する差別・偏見の認識の程度と高齢者イメージ因子の関連

社会に高齢者に対する差別や偏見があるかとの回答割合と高齢者イメージとの関連を見た結果、日本の大学生群では、差別・偏見があると認める程度と高齢者のイメージの因子別評点との間には、全てにおいて有意な関連が認められた。すなわち、差別・偏見がないと回答した群ほど、高齢者のイメージ評点は高いという関連性が認められた。他方、スリランカの学生群では、社会に高齢者に対する差別・偏見があると認める程度と、高齢者イメージ因子の各評点との間には有意な差は認められず、ほぼ同程度の評点となっていた。この理由として、スリランカの学生の７割弱という同居率の高さが、高齢者イメージの評価の均質さに影響しているとも考えられる。さらにその背景分析が必要と思われた。

14. スリランカの調査結果に関する考察

共同研究機関であるスリランカの NISD 側の調査報告から、以下の諸点が指摘された（Jeyaruban, 2014）。

１）本調査研究のように一つのサンプル調査には限界があり、学生という20歳台初期のサンプルについても、他の多くの質的な研究を行う必要がある。

２）若者に対する意見を求める場合も、農村地方に居住する者と都市部に居住する若者の意見には隔たりがある。高齢者に対する自己イメージや社会的イメージの研究においても、そのような観点からの研究を多く実施する必要があろう。

３）スリランカの学生の回答から、家族中心のケアとい

う確たる拡大家族のシステムが根づいていることが明らかとなった。

４）スリランカの学生の62% は、彼らが結婚後も拡大家族の中で老親と暮らすことに好意的な回答が得られた。

５）学生の34% が、核家族の中で生活したいという意向を示した。

６）学生が彼らの両親と、たとえ結婚後も共に暮らしたいという意向を示したことは、スリランカ国の文化に根ざした精神的特質の影響を示唆している。

７）結婚後もスリランカの学生が両親と同居することを選択する割合は、全体として約９割であり、同居しないとの回答は１%、残りの９% が判断保留であった。

８）回答学生の70% が、彼らの老親のために経済的な支援をすることに賛同していた。

９）老親のために経済的支援をすることに賛同する男子学生は75.5% であり、他方、女子学生の66.5% がその意見に賛同しており、わずかながら回答率に相違が認められた。

10）要介護の両親の唯一の介護者として子供に期待する古来からの伝統は若者の大半（84.1%）に支持されていた。

11）老親の日々の日課の世話は子ども（大学生）がするのが当然という回答は41.3% であり、他方、社会が世話するのが当然とする回答も40% に見られた。このような状況は、家族のみで全面的にケアを提供できない家族においては、ジレンマが生じていると解釈される。

12）社会が面倒をみるという考え方は、新たな課題であるように見える。回答学生の62.5% は施設ケアは避けるべきであると回答した。うち、回答者の１% は将来において老親を施設でケアするという考えは非倫理的であると回答した。このことは、社会的支援を受けつつ家族がケアするという選択肢に学生の73.7% が賛同していることに、その倫理的な不確定さが表われている。

13）高齢者ケアとは、老いることに受容的になることである。そのことは高齢者のケアに責任を持ち、高齢者と信頼できる関係を築くことが両親に対する親孝行であるという回答から明らかとなった。

14）高齢者に好意的な政策とは、高齢者が要求する社会的参加を高める政策を十分に講ずることである。社会的支援（ソーシャルサポート）に対する学生の無関心は、この考え方を評価する際に重要な変数として考慮されるべきである。

15）回答学生の大半（79.5%）は活動的に老いることの認識がなく、身体的にも精神的にも健康に恵まれず、老いに不安を抱いている高齢者の関するイメージを抱いていた。

16）学生は彼らの老親に関しての関心は抱いているものの、彼らの４割強（43.9%）は、国の高齢化問題に関しての多面性やその重要度については十分な認識に至っていない。

17）女子学生の６割は、高齢問題に関して強い関心を抱いていた。

18）スリランカ社会においては、高齢者は優遇されているということに積極的に同意した回答はわずか14% であった。他方、0.7% を除き、回答学生の８割以上は、スリランカ社会では高齢者に対する差別や偏見があることを認めていた。

19）この調査研究は、ソーシャルワーク的介入を必要とする高齢者ケアに関連した問題に対する認識を高める。

20）上記で引用した研究で得られた各種の証拠は、人との関係性や交流意識を高める上で重要とみなされる社会的イメージ、十分なコミュニケーション、親密性、ともに暮らし・働くことの重要性を強調している。

21）定期的で頻繁な高齢者とのコミュニケーション、日没から就寝の間に高齢者の尊厳を高めるようなナイトケアのあり方、学生が彼らの両親をサポートするために要求される両親との関係のあり方・意識的覚知を改善する必要がある。

22）本調査の結果から、学生が世代間の親睦と調和をもたらすことができるように、無意図的に加齢について形成している知覚を変容させるべく支援することが重要である。

23）若い大学生が、高齢者と頻繁に交流するための方策が講じられる必要がある。高齢者についての根拠のない印象を排除し、高齢者をより肯定的に捉えることの学習や観察に資するような政策が必要である。

今後の検討課題

１．本調査は、超高齢社会の将来の担い手である若者世代（大学生）を対象とした調査であった。経済的自立を親に依存している世代であり、社会人・市民としての自覚が必ずしも十分でない世代層に対する調査である。今後は、年金・医療・介護の社会保障制度を直接的に支えている親世代を調査すること、また主に受益者の立場にある祖父母世代を調査することで世代間の意識・態度の一致点・相違点を明らかにしていくことが重要と考えられる。

２．本調査は、スリランカと日本の大学生を対象とした調査であった。年齢・性別の割合がほぼ同じであった以外は、高齢化率・文化・宗教・社会保障に関する政策や

重点施策も異なる国同士の比較である。その意味で、個別の設問の回答割合を単純に比較することの意義は薄いが、回答項目間の関連性を各国で個別に分析して、その関連性の在り方に認められる共通性や差異性を明らかにして、その文化的背景を比較することは意義があると考えられる。

謝辞

本研究調査の報告書が完成した2014年10月現在までに、ほぼ３年間の準備期間があり、その間に東海大学側から３度にわたるスリランカ国 NISD への訪問と現地での関連施設の視察が行われた。健康科学部からはのべ10名の専任教員が、その視察に参加した。スリランカ NISD からは、のべ４名の研究員が東海大学健康科学部を訪問され、学生への特別講義や本研究の打ち合わせ、ならびに調査報告のための合同セミナーに参加された。

国際研究交流を推進するためには、両機関同士の信頼感の醸成と MoU（了解覚書）の締結が不可欠である。そのために尽力いただいた健康科学部の過去２代にわたる学部長ならびに東海大学当局には多くのご支援をいただいたことに深く感謝申し上げる。また、本調査の実施に際しては、東海大学４学部、神奈川県・東京都・千葉県下にある国立大学２校と私立大学４校の教員の方々と調査に回答していただいた学生の皆様のご協力に対して深く感謝申し上げる次第である。（筆頭執筆者・谷口幸一）

参考文献

・秋山美栄子　2014　高齢者イメージ－イメージをもたらすもの・規定するもの　[日本老年行動科学会編 : 高齢者のこころとからだ事典：9-2] 中央法規　338-339
・ Dept of Economic & Social Affairs (2002), World population Ageing 1950-2050, United Nation, New York, United Nation Publication Population Division
・ Fernando D.N & Seneviratna R.De.A (1994) Social and health aspects of elderly women, Center for Women's Research, Sri Lanka 3rd-6th March, 1994, pp1-5
・藤田綾子　2010 「尊厳維持」大内尉義・秋山弘子編・「新老年学（第３版）」：1912-16　東京大学出版会
・原田謙 , 杉澤秀博、杉原陽子、山田嘉子、柴田博　2004　日本語版 Fraboni エイジズム尺度 (FSA) 短縮版の作成 . 老年社会科学26巻3号：308-319
・ Gunasekara, L. (2003) Situation of the Elders in Sri Lanka: Emerging Trends and Welfare Measures, FOSOD, Ministry of Social Welfare, Sri Lanka
・ Heise BA1, Johnsen V, Himes D, Wing D, 2012, Nurs Educ Perspect. 2012 May-Jun; 33(3): 156-61. Developing positive attitudes toward geriatric nursing among Millennials and Generation, Bowen CE1, Skirbekk V. http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pubmed/24150178 accessed 25.06.2014
・保坂久美子・袖井孝子　1988　大学生による老人イメージ―SD 法による分析、社会老年学　27：22-33
・堀薫夫　1996 「エイジングへの意識」の世代間比較、老年社会科学、17(2): 138-147.
・Jeyaruban, V.R：2014　An Analytical Study of the Responses Received from the University Students in Japan and Sri Lanka The report prepared by the National Institute of Social Development (NISD), Sri Lanka.From the report submitted at the half day seminar in Tokai university held on July 26, 2014
・古谷野亘著　1988　多変量解析ガイド－調査データのまとめ方　川島書店
・片多順　2014 高齢者への偏見・差別　[日本老年行動科学会編 : 高齢者のこころとからだ事典 : 9-4]　中央法規　342-343
・国際長寿社会日本リーダーシップセンター編　1995 「地域社会における高齢者に関する福祉教育の現状に関する調査研究」報告書
・牧里毎治・杉岡直人・森本佳樹［編］ 2013　ビギナーズ地域福祉　有斐閣アルマ
・森岡清美他　1993 「新社会学辞典」有斐閣
・内閣府　2003 高齢社会対策に関する調査－平成15年度年齢・加齢に対する考え方に関する意識調査結果【PDF 形式，2004, 平成16年６月発刊】.
・ Perera P.D.A, 1999 Population Trends in Sri Lanka: Implication for the Family & Elderly Social Development, Marga Institute.
・ Population ageing profile 2013, Population Division, DESA, United Nations, http://esa.un.org/unpd/popdev/AgingProfiles2013/default.aspx Accessed on 29.06.2014
・ Peiris, M.U. 2014 Present Conditions and further problems of the Health and Social Welfare. The report submitted at the half day seminar in Tokai university held on July 26, 2014
・ Palmore E.B. 1977 Facts on Aging: A Short Quiz. The Gerontologist, 17(4): 315-320.
・ Palmore E.B. 1988 The Facts on Aging Quiz. Springer Pub., New York.
・ Silva.D.I & Samarasekara, D 1999 Population Ageing: Emerging Issues in Sri Lanka. Economic Review. April/May 1999, Sri Lanka
・杉啓以子著　2012　よみがえる笑顔－老人と子どもふれあいの記録　静山社
・ Tudor Silva, K 2004, Elderly population, Family Support and Intergenerational Arrangements, UNFPA, Sri Lanka (pp 46-75)
・東海大学健康科学部国際交流プロジェクト（編）2014「大学生の親扶養意識と高齢社会に対する関心度に関する国際比較調査報告書」東海大学健康科学部

・ UNFPA, 2004 Ageing population in Sri Lanka; Issues and Future Prospects, Sri lanka
・谷口幸一2010 「老年学教育―初・中等教育における老年学教育」大内尉義・秋山弘子編 「新老年学（第３版）」:1929-33　東京大学出版会
・ Yaguchi, K: 2014 The Collaborative Study between NISD in Sri Lanka and Tokai University in Japan: The report submitted at the half day seminar in Tokai university held on July 26, 2014
・谷口幸一　2014　エイジング教育　[日本老年行動科学会編 : 高齢者のこころとからだ事典 :9-5]　中央法規　344-345
・谷口幸一・宮永耕・妻鹿ふみ子・小林理・阿部正昭・田中美加・児玉千代子・菅野和恵・Vasudevan, G., Jeyaruban. V., W.M. Dhanapala: 2014「エイジズムが高齢者イメージに及ぼす影響に関する調査研究」日本老年行動科学会17回大会発表抄録集 p.40.
・ Wickramasinghe, C, Sri Lanka Statement; Second world Assembly on Ageing. 11th April 2002 http://www.un.org/swaa2002/coverage/srilankaE.htm, Accessed on 30.06.2014
・ World Health Organization 2002 Health Ageing: A Discussion Paper. Department of health and Promotion, WHO, Geneva.